
駆け込み乗車

三上夏一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

駆け込み乗車

【著者名】

N1751M

【作者名】

三上夏一郎

【あらすじ】

「今日こそこは、断固として駆け込み乗車を許さない」と心に決めて出勤した地下鉄の運転手木島は、その通りのことを実行して悲劇を生む。

駆け込み乗車

三上夏一郎

次の駅が、近付いてきた。

「今日こそは、駆け込み乗車は絶対に許さないからな」

運転士の木島一成は、トンネルの闇に向かって眩きながら、ブレーキレバーを手前に引いた。

その地下鉄路線では最も深い地下にある次の駅は、エスカレーターの降り口が、微妙な位置にある。飛び乗ろうとする乗客がもし、発車のベルが鳴り終わる直前に駆け出すると、何とか間に合ってしまうのだ。そのせいで、発車間際に駆け込んで来る乗客が必ず何人かいる。それも、かなりの勢いで駆け込んで来るので、いつもひやひやさせられる上、電車が微妙に遅れる原因にもなっていた。

『今日こそは、必ず発車のベルが鳴り終わると同時に扉を閉め、電車を発進させるのだ』

木島は、目の前にひろがる暗闇を睨みつけた。

出掛けに妻の郁子と激しく言い争つたおかげで、木島の気持ちは荒れていた。今朝、玄関先で妻は木島にくつてかかった。木島の実家がある、東北地方のちいさな町の寺から、寄付の催促が来たというのだ。

『出掛けにそんな話はやめてくれと言つてあるだらう』

『だつてあなた、昨夜私が話をしようとしたらせつと寝ちゃつたじゃないの』

『わかつたわかつた、じゃあ、そのことについては今晩ゆつくりと話すことにしてよ』

適当に話を切り上げて家を出ようとした木島だつたが、妻は引き下

がらなかつた。よほど頭にきていたらし。

「どうせ私、絶対あんな寺のお墓には入らないんだから。望だつて、絶対にそつはさせない」

「はあ？」

妻が娘のことを話しているのだと知り、木島は畠然とした。娘の望はまだ小学校の一年生である。その娘が、墓に入る時のこととこの女が考へているとは……

しばし言葉を失つてしまつた木島に向かい、妻の郁子はまくしたてた。「あの子の進学に幾らかかると思つてるの？ そのために私がどんな思いでお金を節約して貯金してきたかわかつてるの？ そのお金を……見ず知らずの田舎寺の坊主に巻り取られるなんて……絶対に許せない」

『まるで夜叉だ』

まくしたてる妻の顔を見ながら、木島は思つた。話し合ひは、成立しそうにない。

「わかつたよ、何とかするから」

「どうせいつも口先だけでしょ！」

玄関にいればそれだけ文句が続きそうだと判断した木島は、妻の罵声を背中に受けて、逃げるように家を出た。通勤に使つてゐる最寄りの駅に向かつて歩きながらしづらしくすると、猛烈に怒りがこみ上げてきた。

『何か言いたいことがあつたら、夜のうちに言つてくれ、出掛けにだけは、喧嘩しないようにわせてくれ、仕事に差し支えるからとあれほど頼んでいるのに……』

木島は、地下鉄の運転士である。出掛けに気持ちが乱れると、一日中その日の運転に影響するのだ。墓と、娘の望の進学に関しては、ここ一年ばかり、ことある度に妻とは言い争つてきた。それにしたつて何も朝、出がけにその話を蒸し返すことはないじゃないか、と思つたのである。

「くそー」いつもの駅に向かつて歩きながら木島は呟いた。「今

田といつ今日は俺も頭にきたぞ

といつて、引き返し、妻とやりあう時間はもはやない。木島は、その不満と怒りを、仕事に向けることにした。

「ふざけるなよ。駆け込み乗車がどんなに危険か、今日こそ思い知らせてやる……」

木島はブレーキレバーを引き、地下鉄を減速させた。

高階洋平は、急いでいた。家を出るのが遅れたのは、単にぼうつとしていたせいである。半年ほど前、四十数年連れ添った妻が急死した。くも膜下出血だつた。

それから、ぼうつとする時間が長くなつた。

『だからといつて、約束の時刻に遅れるわけにはいかん』

地下鉄のシルバーシートで、洋平は腕時計に目をやつた。久しぶりに出席する、会社の旧友会である。かつて机を並べ、時には同じ釜の飯を食い、共通の目的を達成するために汗を流した仲間たちと再会するのだ。現役で仕事をしている時は、仲がいいとは言えなかつた連中だが、定年退職してからは、急速に仲間意識が芽生えてきている。皮肉なものだつた。

『確か、次の駅で乗り換えだつたな』

洋平は腕時計から目を上げると、よつこりしょ、と立ち上がつた。素早く降りられるよう、なるべく早めにドアのそばまで移動しておいたほうがいい、と考えたのだ。最近の自分の体力の無さ、運動神経の衰えは十分に自覚している。

その時、電車がカーブにさしかかり、ガタン、と揺れた。

「おつとつと

よろけた洋平は、吊り革につかまつりとした。しかしその手は空を搔いた。バランスを失い、倒れそうになつた洋平は、思わずそばにいた若い女の腰に抱きついていた。

「なにすんだよ！ このジジイ！

女は洋平の手をふり解き、いきなり突き飛ばした。洋平は電車の床

に尻餅をついた。

「どうしたんだよ、ユキ」

女の連れ合いとみられる若い男が、女に歩み寄った。長髪を茶色に染め、サングラスを頭に乗せている。日焼けした肌はざらざらに荒れ、線のように細い目で洋平を睨み付けた。人間というより、とかげや蛇の仲間のような顔だった。血が通っていないような、ひとかけらの知性も感じられない凶暴さがにじみ出ている。

「いや、失礼」

洋平はのろのろと立ち上がった。

「このジジイ、ふざけやがって」女が洋平を指をして言った。「あたしのお尻に、抱きついたんだ」

「あんだと?」このじじいが?

ポケットに両手を突っ込んだ凶暴そうな若い男は、洋平の胸ぐらを掴み、ドアに押しつけた。同時に電車が駅に停まり、扉が開いた。

「外に出るこの野郎」

若い男は洋平をホームへ突き飛ばした。

「おつとつと」

洋平はたたらを踏むように駅のホームに押し出された。訳がわからなかつた。大変な誤解を受けていることは確かだつた。何とかしなくてはいけない。

「ジジイのくせになめた真似をしきりつて。てめえ、ぶつ殺してやる」

凶暴そうな若い男はガムを噛みながら大股で近付いて来る。洋平を睨み付けるその顔には、慈悲や優しさのかけらもない。同じ人間とは思えなかつた。やはりは虫類か、下等な動物と向き合つてゐる感じである。

「1、「誤解だよ君。とにかく落ち着きなさい」

しかし、とにかくこのままでは乗り換える電車に遅れるどころか、更にたいへんなことになると思った洋平は、若い男を制するよつて両手を前に突き出した。

「おい、誤解だつてよ」

若い男はフン、と鼻で笑い、後ろを振り返つた。さつき洋平が抱きついてしまつたユキと呼ばれる女が、ポケットに両手を突っ込んで立つていた。

「冗談じゃねえよ。誤解つてことがあるかよ」

男みたいな口調でユキという女が言つた。彼氏に負けず劣らず頭は弱そうだ。しかし今はそんなことを言つている場合ではない。

「で、電車が揺れたせいなんだ。わざとじゃない」

年長者の威儀を出せればいいのだが、と思いつつ、洋平は懸命に弁解を試みる。

「そうかよ」

効果はまったくないようだつた。いきなり、若い男の蹴りが洋平の腹に飛んできた。

「ぐえつ」

まさかそんなことを予想していなかつた洋平は、まともにその蹴りを腹に受け、体をくの字に折り曲げ、その場につづくまつた。

「いいぞいいぞ、やつちやえやつちやえ」

女がはしゃぎたて、手を叩いてぴょんぴょん飛び上がつた。「じじいに強いとこ見せてやんなよトオルちゃん」

「おうよ」

トオルと呼ばれた若い男は、腹を押されて下を向いた洋平の顔に、ポケットに手を突っ込んだまま膝蹴りを飛ばした。洋平にはよけるだけの反射神経がない。まともに食らつた。

「ぶつ」

鼻を中心として、鈍い衝撃があつた。洋平はよろめき、ホームに尻もちをついた。たらり、と鼻穴から流れ出でくるものがある。手で押さえて、その手を開いてみると真っ赤に染まつっていた。かなりの量の鼻血が流れている。しかし思つたほどのダメージはなかつた。膝蹴りは正確ではなく、当たりが浅かつたのだ。若い男がポケットに手を突っ込んでいたせいかもしれない。

「なにやつてんだよ。蹴りぐらいちゃんと入れるよ」

ユキがトオルの頭を平手でぴしゃりと横殴りにした。

「バカヤロー、髪型が乱れるだろ！」

トオルはどうやら反射的にユキの頬を思いっきり平手で殴りつけた。ピシイイイと、すゞい音がした。

「いつてー」

ユキが殴られた頬をおさえてうずくまつた。

「なめんじゃねえよバカアマ」

吐き捨てるように言うと、トオルは洋平の方を振り向いた。「じじい。みんなでめえのせいだぞ」

トオルは、暴力を楽しむかのように一ヤーヤと笑いながら洋平に一步一歩近付いて行く。

「たすけて……」

洋平は叫ぼうとしたが、まともな声が出ない。恐怖のなせる技だった。ホームを行く人たちは、皆見て見ぬふりをし、足早に通り過ぎて行く。

『殺される……』

洋平は心底恐怖した。トオルの後ろで、ユキという女が憎しみに満ちた目で立ち上がるのが見えた。信じられないことに、ユキは次の瞬間、トオルの背中に向かって飛び蹴りをした。

「ぐつ」

蹴り 자체はたいしたことはなかつたが、不意をつかれたトオルはよろめいた。怒りの表情でユキを振り向く。

「てめえ」

火事場のくそ力、とはよく言ったものである。トオルがユキに気を取られたその時、洋平はすくっと立ち上がると、上りのエスカレーターに向かつて駆け出した。

「あ、じじいが逃げた！」ユキが叫んだ。

「なに？」

再びトオルの意識が洋平に向けられる。「待ちやがれっ！」

トオルが洋平の後を追つて駆け出した。

洋平は必死で駆けた。駆けに駆けた。こんなに真剣に走つたことは、六十二年の人生で記憶にない。上りのエスカレーターを駆け上り、駅の構内を走りながら駅員の姿を探す。しかし、こういう時に限つて駅員の姿は見えないのだ。人員削減、といつ言葉がなぜかその時洋平の頭の中に浮かんだ。

「逃げるんじゃねえよ、じじい！」

背中からトオルの声が迫つてくる。もうすぐ後ろまで来ている感じだ。洋平は乗り換え用の下りのエスカレーターに向かつた。心臓がばくばくしている。苦しい。しかし、止まるわけにはいかない。あんな下等動物みたいな連中に、殺されたのでは堪らない。何の為の人生だつたのか。

洋平は下りのエスカレーターを必死で駆け下りた。乗り換える筈だつた別の路線の地下鉄が、ホームに着いた音がする。

「駆け込み乗車は危険ですからおやめください」

アナウンスが聞こえてきた。しかしそんなことはかまつていられない。なにしろ後ろから、凶暴なあの若者が迫つてきているのだ。

ホームに発車ブザーが鳴り響いている。

先頭の車両には、鈴なりの人が乗り込もうとしていた。飛び込む余地はなさそうだ。洋平は先頭車両を通り過ぎ、二両目の最初のドアに飛び込もうとした。

『すごい勢いで駆けてくる奴がひとり』

地下鉄の運転席にいた木島一成は、エスカレーターを必死の形相で駆け下りてくる洋平を認識していた。しかし決めたことは決めたことだ。

『発車のベルが鳴り終わつたら、とにかく迷わず扉を閉める』木島はドアを開け閉めするボタンに手をかけた。『思い知るがいい、駆け込み乗車の乗客たちよ。お前たちのおかげでダイヤは乱れ、俺たち地下鉄の職員がどれほどのストレスを受けているか』

発車のベルが鳴り終わった。木島は何の躊躇もなく、扉が閉まるボタンを押した。

電車のドアはもう田の前にある。心臓と肺は何とか持ち堪えてくれたようだ。死にそ่งだが、なんとかなる。

『電車に飛び込みさえすれば……逃げ切れる。助かる』

僅かな望みに賭けて、一二両田の最初のドアに飛び込もうとした洋平の目の前で無情にもドアが閉まつた。

「目標、達成！」

飛び込み乗車をしようとした乗客の田の前でドアが閉まつたことを確認すると、満面に笑みを浮かべて、運転士の木島は電車を発進させた。

「あわわ」

洋平は電車と一緒によちよちと歩き出した。そうせざるを得ない状況にあつたのだ。背広の襟のほんの一部が、扉に挟まれている。面積にして、ほんのわずか。こんなもの、すぐに抜けるとかをくくつていたのだが、どんなに引っ張つても抜けないのだ。運転士は気付かないらしく、電車はゆるゆると進み始めている。

『挟まれた面積が小さすぎて、センサーが作動しないのかもしれない……』

蟹のように、横歩きに小刻みに足を運びながら洋平はなぜか冷静にそんなことを思った。

突然、ホームに楽しそうな声が響きわたつた。

『なにやつてんだよ、じじい』

その声に振り向いた洋平は、追いついたトオルが、地下鉄のドアに張り付いたままよちよちと歩く自分の奇妙な格好を指さして笑つているのを見た。

『追いついたぞ。もう逃がさねえからな』

洋平は額に脂汗を浮かべ、蟹のように電車と平行に歩いて行く。電車のスピードが上がり始める。足を小刻みに早く動かさなくては追いつかない。

「おい、どうしたんだよジジイ」

トオルは、洋平の置かれた困った状況に気付き、手を叩いてはやしたてながら後ろと一緒に走り出した。

「た、助けてくれ、背広が」

電車と一緒に走りながら、洋平はトオルに懇願した。しかし、

「背広が？ 挟まつてんのかよ！ まじかよ！」

と信じられないことに、トオルは洋平を指さしてげらげらと笑うだけだった。

「お願ひだ。電車を止めて」

視界の端に、トンネルと壁がぐんぐんと迫つてくる。洋平は悲鳴をあげ、扉に挟まつた背広を引き抜こうと必死に体をのけぞらせた。電車はしかし、スピードを緩めるどころか、ぐんぐんと加速していく。何かの間違いに違いない。じきセンサーが働く筈だ。でなければこれは、極めて悪質な冗談だ。

『どうなつてるんだおい！』

と思つた瞬間、頭にガン、と衝撃がきて、世界が終わつた。

エスカレーターからふて腐れたように降りてきたユキは、だらだらと歩きながらホームにうずくまるトオルに近づいて行つた。

「おい、じじいはどうなつたんだよ」

しかしひトオルは答えなかつた。しゃがんだまま、トンネルの壁を呆然と見つめている。

「おい、ちゃんとじじいに追いついたのかつて聞いてんだよ」

ユキはトオルの肩に手をかけて、無理やりに振り向かせた。次の瞬間、

「キヤ——————！」

と、コキは絶叫した。

トオルは上半身、血まみれになっていた。

「返り血だよ。俺の血じゃねえ」

言い訳するよつて言つと、トオルは立ち上がり、足元に転がる、血まみれの物体を足で転がした。

「じじいの首が、とれちまつてよ」

それは、半分潰れてぐしゃぐしゃになつた洋平の首だつた。首はごろりと転がり、片方だけ残つた死んだ魚のような目が、どうりとコキの顔に向けられた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1751m/>

駆け込み乗車

2010年10月10日21時28分発行